
魔法少女リリカルなのはU F D-unforgiven destroyer-

優氣凛々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはUFD - unforgiven des
troyer -

【Nコード】

N3453Z

【作者名】

優氣凜々

【あらすじ】

少年は光をもたらし、闇へと誘う紛い物…

故に許されざる者 - unforgiven - …

そして、全てを守るため、障害を全て破壊する破壊者 - destr
oyer - …

彼は何を守り、何を壊すのか…

魔法少女リリカルなのはUFD… 始まります。

魔法少女リリカルなのはの二次創作です!!
苦手だと言うかたは今すぐ回れ右してください!

なお、ちょいえっちい表現が出てしまう場合もあるので、それも苦手だと言うかたは今すぐ回れ右してください!

プロローグ (前書き)

優氣凛々「私はいろいろ小説作ってるのに……バカなんですかね……？」

とにかく、よろしくお願いいたします！」

プロローグ

春…まだ雀が鳴く声が響くくらい朝早く……海鳴市の朝は海のさざ波の音と日の出と共に始まる……

そんな海鳴市のとあるマンションの一室……全40階の高層マンションの38階……3802号室で……天魔^{てんま} 神^{じん}が生活を営んでいる。

神「……朝か…んっ！んっ！んっ！よく寝た。」

部屋のベッドからのっそり起き上がった少年は…髪の毛が右側が黒、左側が白と…不思議な色をしていて、目が右側が赤、左側が緑といういわゆるオッドアイというやつである。

そう、この少年の名は皆が想像した通り、天魔 神である。

神はベッドの横にあるテーブルに置いてある眼鏡を取って顔にかけた。

神「…まだ3時だ……眠くないし…少し手の込んだ料理つくるかな？」

神がベッドを立ち上がると……

？《おはよう、神！！》

？《おはよう、我が主よ！》

何処からともなく声がする……すると、神は首につけていたチヨーカーに付いている黒、白、2つの十字架に手を添え、

神「おはよう、ガブリエル」

白い十字架をガブリエルと呼び撫で……

神「おはよう、ベルゼピユート」

黒い十字架をベルゼピユートと呼び撫でた……

ガブリエル《今日は早起きだね？よく寝ないと体にさわるからね？》

ベルゼピユート《そうだぞ我が主……。主の健康は私の喜び……主に何かあったら面目立たんわ……》

ガブリエルとベルゼピユートは神の身体を気遣っていた……。

神「大丈夫、問題なしさ さあて、今日も学校だから手の込んだ弁

当でもつくるかな!!」

ガブリエル《それはいいね 神の料理はどんなレストランにもひけを取らないから楽しみ》

ベルゼビュート《それはそうであろうガブリエルよ…主は容姿端麗、才色兼備なのだ!我が主にふさわしい男なのだぞ!!》

神「ハイハイ、んじゃ行こうか!」

そして神はキッチンへと足を運ぶ…

天魔 神の非日常は…どんどん近づいて来ていることを……誰も知らない…

魔法少女リリカルなのはUFD・UnForgiven Dest
royer…: 始まります。

プロローグ (後書き)

オマケ

神「それにしてもさ……」

ガブリエルとベルゼブュートが十字架なのはいいよ？

何故にチョーカー？あれか？僕にMになれと？」

チョーカーなのは、単にネックレスなどありきたりな為に趣向
替えです趣向替え。

人物紹介（前書き）

優氣凛々「人物紹介します！！若干ネタバレあり！見たくない人は
回れ右してください！」

人物紹介

主人公

名前：天魔てんま 神しん

年齢：15歳

性別：男

身長：170?

体重：68?

好きな/得意なこと：

剣術、和もの、身体を動かす、友達/料理、剣術、勉強

嫌いな/苦手なこと：

人付き合い、自分の大事なものを傷つける行為/犬、女の子

外見的特徴：髪の毛が右側が黒、左側が白

目は右側が赤、左側が緑といういわゆるオッドアイ。眼鏡を着用（
ド近眼のため）

顔はやや男寄りだが、中性的な顔つきに見えなくもない。

引き締まっっていてちょうどいいくらいの体つき。

魔導師ランク：ガブリエル：S+

ベルゼピュート：SS

詳細：

”大天使ガブリエル”と”魔王ベルゼピュート”と契約している少

年。チョーカーに付いている黒、白の十字架にそれぞれ封印して
て、どちらかを取ると付いている十字架に依存した力を使える。
性格はかなりめんどくさがり。しかし、人が困っているとついつい
首を突っ込みたがる。
しかも人想いで親切なため、時間にルーズ。正直者でストレート発
言がポロリするときがある。
聖祥大学附属中学校3年2組で、高町 なのは等とは面識はあるも
のの話したことはない。

高町 なのはが魔導師に襲われているところを力を使い助けた為
面倒に巻き込まれるはめに…
デバイスは持っていないが、自分の愛刀”ムラマサ”を使う。

名前：ガブリエル

年齢：157,000歳

性別：女

身長：150?

体重：

好きな/得意なこと：

昼寝、神、神の料理/探知、防御、遠距離攻撃

嫌いな/苦手なこと：

身長の指摘、神を傷つける行為/料理を作る、運動

外見的特徴：髪の毛が純白。目は緑。かなり幼児体型。しかし胸は
ある。翼3対生やし、布を巻いたような服を来ている。

詳細：神と契約している大天使。天魔家は代々天使と悪魔を使役する能力を有しており、神と契約した。神を心から敬愛し、母親のような存在。

ベルゼビュートとは本来仲が悪いが、神の仲介により和解。かなり仲が良くなった。

防御、回復が得意。

神の使用時：髪の毛が純白に変わり、身体を透明なベールが包み、天使の翼3対を生やす。ムラマサを防御ベールで包み敵の攻撃を無力化する剣技”絶対防御ノ刀”^{イジスソード}が使える。

名前：ベルゼビュート

年齢：158,400歳

性別：女

身長：162?

体重：

好きな/得意なこと：

神、神と共闘する事、可愛いもの/近距離戦闘、身体強化

嫌いな/苦手なこと：

神を傷つける行為、神にまわりつく女/言葉を選ぶこと、加減

詳細：神と契約している魔王。経歴はガブリエルと同じ。

ガブリエルと対極のように近距離戦闘、身体強化が得意。性格は神一筋でツンデレとヤンデレを足して2で割った感じ。口下手で他人を傷つけることがしばしば。神もほとほと困っている。

神の使用時：髪の毛が漆黒となり、防護服”ベルゼベール”を着用する。上が黒のアンダーアーマー、グローブ、下が黒のレギンス。頭に1対の角、背中に翼が生える。一撃粉碎の剣”破壊ノ刀”ラクナロクソードを使用する。

技説明：

覇哮鱗はこうりん

ガブリエル時の誘導弾。光輝く球体を打ち出すスキル。
限界産生弾数が1回40発。

覇鳳轟はほうこう

ガブリエル時の長距離砲撃。威力はなのはのデイベインバスター並み。違いは複数同時展開が可能なこと。最大4こ

摩天楼まてんろう

ベルゼビュート時の抜刀術。身体強化で高め、音速を越える抜刀を繰り出し相手を斬る。一閃はつこう八剛まである。

魔滅黒火まめつしつか

ベルゼビュート時の剣技。剣に漆黒の魔力を纏わせ、相手を斬る。威力はなのはのスターライトブレイカー並み。

第1話「魔導師」(前書き)

優氣凛々「またなんとも言えないぐだぐだ加減だな…」

でもまあ、読んでやってください…」

第1話「魔導師」

聖祥大学附属中学校……

小学校から大学までエスカレーター式で上がれるため何かと楽なのだ。

今の時刻は朝8時25分。授業開始は8時30分。ギリギリの時間帯である。神の家から学校まではおよそ20分かかる……

神はいつも8時には家を出る……もう学校に着いてていいのだが……

神「おばちゃん、ここまででいいかい？」

おばあちゃん「助かったわあ！！ありがとう神ちゃん！」

神は学校まであと5分くらいのところで30歳くらいのおばちゃんの荷物を運んでいた。……遅刻確定である。

神もおばちゃんと別れ、腕時計を見るやいなや……

神「……遅刻確定か……仕方ないよなあ……」

自分で自分に呆れていた。

実はこうした遅刻パターンが時々あるのだ。ないときはないが、あるときは昼休みまでさぼらされる時もある。

ガブリエル《お人好しが過ぎると思うよ?》

ベルゼピュート《我也同感だ。》

神「うーん……でも直すつもりはないんだよね。全く面倒だし……」

二人《《自分のことを面倒くさがってどうする?》》

神「あはは……まあ勉強は大丈夫でしょ?人並みにはできるしね?」

二人《《そういう問題じゃない!》》

ガブリエル《……神の未来が心配になってきたね……》

ベルゼピュート《……全くだ……》

と、ガブリエルとベルゼピュートとだべりながら、神は学校へと足を運んだ。

先生「……………2年の時も同じ理由だからだいたいわかるけど……
どうして遅刻したの？」

現在、一時限目が終わった時間。担任の先生はもはやあきれた顔で神を見ている。因みに先生は女性です。

神は臆することなくさりと

神「今日はおばちゃんの荷物を運んで、あと少しのところでおじいちゃんの横断を手伝いました！」

しかも、ガッツポーズとどや顔で先生に言った。

先生「あなたねえ……………お人好し過ぎないかしら？もう少し時と場を考えてよ？」

神「無理です！面倒だし……………じゃなくて、今さら直りません！！」

先生は机にうなだれた。神は素晴らしく正直者で、本音を言ったあとに嘘をつくから嘘が嘘になっていないのだ。

先生「わかったわ……………とにかく教室に行って授業受けなさい……………」

神「わかりました〜！」

職員室を出る間際……

神「あ、先生そういう髪型変えたんですか？可愛いと思いますよ！んじゃ〜！」

こんなことを言うもんだからさぁ大変…

先生「〜っ！！！！！！！！と……年下も良いかも…！！」

先生を朝から赤くさせていた。

神はストレート発言がポロリするときがあるため、たまにこんなことが起きるのだ。

ガブリエル《（いつも思うけどさ…）》

ベルゼビウト《（安心せい…余も思っている…）》

二人《（早めに対処しなければ神（主）の人生本当にややこしいことに…！！）》

.....

神は「3年2組」と書かれた札の扉を開き、教室に入る。

するじ……

クラスから白い眼を浴びせられた。全員でないにしろ、約半数はそうであろう。

神はそんなことお構いなしにずかずかと自分の机に座った。

男子「おい…また遅れて来やがったぜ？あいつ…」

女子「目付きも怖いし…髪の毛染めてるし…不良よね…」

座った途端に始まるひそひそ話……聞こえて来るのは罵詈雑言の数々…

そんな話をBGMに、神は教科書を開く。

神（はぁ……別に悪いことしてないし、地毛なんだってば……全く面倒な…）

そう、神は髪の毛が半分白く、半分黒い。しかも、中性的な顔つきに合わないつり目……

不良とされるのは致し方ないのだが……腑に落ちない。

神（突っ込むのは……まずはオッドアイをするべきじゃ？）

しかし、大抵はひそひそ話をされて終わりなのだ。何故なら…

- 数学の時間 -

バーン!!!

と言わんばかりに黒板にはびつしりと問題が書いてある…しかも中学生ではなく、教授が解いている、懸賞のかかった難題が…

先生「んじゃ〜…高町！これを解いてみる！！」

高町「ふえ…！？うえ〜と…先生？まずその問題、中学生の問題何です…？か？」

カリカリカリカリカリカリ…

キュツキュツキュツ…

カリカリ…カリカリ

先生「そうじゃろ？そうじゃろ！！いくら数学の成績がトップの高町でもこの問題は「せ…先生？後ろ…」なんじゃいなんじゃい！せつかく高町いじりを…堪能…しとって…」

神「あ…すみません先生、困ってたっぼくてつい…でも、これってこうですよ…ね！！」

カリカリ…トン！

そこにはびっしりと式等が書いてあり、きちんと答えも出ていた。

神「そいじゃ、おせっかいでした！」

スタスタスタスタ…

先生含め全員『……………』

・ 体育の時間 ・

神「てな訳で行きますよー！！！」

先生「位置についてー……………ドーン」

バアーン！！

ダッ…！！……………

神「ゴール!!100メートルって長いなあ……」

先生「100メートル……9秒2!？」

男子全員『……………』

- 昼休み -

ガブリエル《神……いつも思うけど……あなたの人付き合いの悪さを覗いたら……》

ベルゼビュート《……主はかなり人気があってもおかしくないの……》

神「はむっ!!……………うーん、そうなんかなあ?僕にやわからん!」

神は人気のない校舎裏で昼を食べていた。

神がこれ以上いじめが発展しない理由……やることをやってないように見えてかなりスペックが高いからだ。

逆を取れば、それゆえに人が近づかないのだ。

しかし……

「にゃん」

「クウーン」

動物にはめっぽうもてるのだ。

神「ほいほい、ご飯だね……?」

その時……少し空気に違和感を覚えた。なんと言っか…
急に空気が重く、はりつめた感じになったのだ。

神「なんだ……!?!」

空を見ようと上を見上げた。すると…

桃、金、二つの光が輝いていた。しかしその光はすぐになくなって
いった…

ガブリエル〈神〉……さっきの光は魔力だよ!!しかも……魔導師が
デバイスを使った時の!」

神「……!!流石ガブリエル!探知能力はずば抜けてるね!…事件の
匂いだ…」

そして神は……早退届けをだし学校を休み、光の反応を追った。

その際、自宅に戻り愛刀”ムラマサ”を手にして……

- 廃工場 - sideなのは -

なのは「次元犯罪者……ドル・ドルトムント！貴方を婦女暴行と殺人、管理外世界での魔法使用の罪で現行犯逮捕します！！」

私はさつきまで学校でしたが、時空管理局から”ランクSの犯罪者がそちらに来た”って聞いて…飛んで来ました！

ドルトムント「ちい……ここは管理外世界だぞ！ならば、お前らの法律は聞かないはずだ！！」

ドルトムントさんの後ろには……あられもない姿で横たわる女の子たちが……

なのは「なら私の私情で言うよ！！女の子を犯すなんて許さないよ！！今ここで捕まえる！！！！」

そこで私は愛機”レイジングハート”に魔力を込め……

なのは「アクセルシューター！！！！」

レイジングハート《accel shooter！！》

10個の魔力弾を作ったけど……

ドルトムント「かかったな！」「ダークバインド」！！！」「

なのは「きゃあああ！！！」「

黒い鎖のようなものに身体を縛られてしまって、魔法が解けて……バリアジャケットから制服に戻ってしまった。……どうしよう！？

ドルトムント「へへへ……よくみりゃ可愛いな……
食べちゃおうか？」

なのは「いや……いやだよ！！……いやあああああ！！！」「

ドルトムントが近づいてきて……制服に手をかけた……その時……

？「制服からして……聖祥大学附属中学校の子だね？

困ってるようだから……おせっかい失礼……」

何処からともなく声が聴こえ……

ドルトムント」……っ！……！」

急にドルトムントが私から離れた。その時瞬間……

ザン！！！！！！！！！！

私とドルトムントの間に割って入るような形で……彼が入ってきた

……

私のクラスの……嫌われものだけど、優しい男の子……

神「全く面倒なことになってるねー！！とりあえずその処理だね
……全っっっく面倒だなあ……」

天魔 神君が………刀を持って肩に担いでいた。

神君の背中が……少し広く感じた。

第2話「天魔 神」（前書き）

優氣凛々「戦闘描写はやはり擬音が必要なんじゃないか？

ぐだぐだ加減が素晴らしいですがよろしくです！」

第2話「天魔 神」

前回のUFD

面倒くさがりなのに面倒を作ってしまう主人公、神。
今回は魔導師に襲われているところを助けちゃった……

- - 廃工場 - -

神「ふむ…状況を察するに…」

そのお兄さんは後ろに縛られているお姉さんを強姦しようとしたら、いいとこにこの子が来て邪魔された腹いせにこいつも強姦してやる…ってところか？」

神は女の子、高町 なのはに近づいて……刀を振り上げ…

ガキン！

黒い鎖を切った。

ドルトムント「な……それは魔法、魔力攻撃では斬れない特殊なバインド、なぜそれを斬ることが出来る！？」

神「魔力攻撃がダメならただ斬れば問題ないでしょ？君が自分で敵

にヒントを与えてどうするの?」

ドルトムントはかなり焦っている。せつかくのダークバインドを男の子ただ一人に破られたのだから……

神はドルトムントを尻目に、なのはに手をさしのべる。

神「校章が緑……僕と同じ3年生だね?別に他意はないから、お名前を聞いても?」

なのはは神の手を優しく握った。

なのは「私はなのは……高町なのはだよ……
天魔……神君……だよね?」

それを確認して自分の腕を引き、たたせる

神「高町……?ああ、よく数字で指される子か。うん、僕は天魔 神。
中学校一の不良だよ。」

神は自嘲的に笑みを浮かべている。なのははあまりそう思っていないらしく、顔が少し険しい。

なのは「別に天魔君が不良だなんて……私は「危ない!!」へ?き
やあああ!!」

なのはが話そうとした瞬間、ドルトムントのいる方向から黒い塊が
飛ばされてきた。神はなのはを抱え込み、ギリギリ避けようとする
が……

神「……………っ!!」

やはり魔力の塊が、神の身体の反応より早く、神の右肩を掠めた。
そのせいか、神はバランスを崩し、なのはを放してしまった。

なのはは放り出された体勢から……自らの相棒を呼び覚ます……

なのは「レイジングハート……セットアップ!!」

レイジングハート《Standby ready…set
u
p!!》

目映い桃の光と共になのはの制服が変わり、セーラー風の白いジャ
ケットにそれに合わせた感じのミニスカート…なのはのバリアジャ
ケットが展開され、手には桃の柄に金色に輝く可変部分を持つ魔導
の杖…レイジングハートが握られている。

なのはは飛行魔法をかけてその場で体勢を整える。

なのは「よ…っと…神君は！？さっき…私を庇って…！！！」

刹那、今まで感じたことがない感覚に陥った。
重い……空気が振動するような……そんな感覚……

なのは「な……何！？この魔力は！？」

レイジングハート《マスター、先ほどの少年からS＋クラスの魔力
反応》

なのは「…え？神君……から？」

相棒の言ったことを信じ神のいた方をみた。

神の周辺には蒼に輝く魔力が神を中心にするようじ集まっていた。

神「……面倒だから、お兄さんには少し寝てもらおうか…？
ガブリエル、いけるかい？」

ガブリエル《もちろん！ボクを誰だと思っているんだい？》

神「……そうだったね。ガブリエル。」

神がチョーカーに掛かった黒い十字架に手を掛ける。ドルトムントは魔力の圧力にあてられ、足がすくんでいる。

ドルトムント「う……動け……逃げろ……！くそ……聞いてねえ……聞いてねえぞこんなのおおお……！！！！！！」

神「聞いてねえも何も、存在すら知らなかったでしょ？お兄さん……」

面倒バースト・オンごとを増やすからこんなことになるんだよ？……ガブリエル、
”封印解除”」

神は黒い十字架を外し、腰のホルダーに掛けた。そして……姿が変わった……

服装は変わらないが、髪型白黒半々から純白に変わり、更には眼も赤と緑のオッドアイが両目緑へと変わった。

そして何より……

背中に……大きく開いた天使の翼…それが三対生えていた。

神「封印解除”…完了。

さあ……面倒だから早く潰れてね？お兄さん…」

ドルトムントは神の存在を恐れた。身体が動かない以上………する事は一つ……

ドルトムント「はあああああ！…！これが俺の本気…ダーク…パニッシュアアアア！…！」

空しい抵抗だった。

ドルトムントは工場を覆わんとする勢いの魔力の塊を作り出す。そして……照準を神に絞り……

ドルトムント「くたばれエエエエエ！……！！！」

その魔力の塊を神に投げつけた。しかし、神は避けようとしな
い。呑気に刀を構えていた。

神「全く……無駄なことは止めなよ。自暴自棄が一番面倒だからさ
あ……

凧ぎ払え……力の存在を……”絶対防御ノ刀”イージスソード」

神が刀を振るった。すると……神に向かっていった魔力の塊がい
とも簡単に裂け、散り散りになっていった。

ドルトムントは絶望に満ちた顔をしながら、地面に膝を付いた。も
うすでに……戦意はないらしい。

神「全ての攻撃を打ち消すスキル……”絶対防御ノ刀”……

回数制限があるけど、決まれば強力さ。

さて、お兄さんがドンパチしなくなったみたいだね？お疲れ様、ガ

ブリエル。」

神がチョーカーに黒い十字架を戻した。すると…翼が消え、眼も、髪のもも元に戻った。

ガブリエル《なんかつまないなあ……煮え切らない!》

神「まあまあ、面倒ごとを一つ無くせただけでも上出来さ!さて、後始末はよくわからないからか「待つて……!!!!!!!!」」

神が帰ろうとしたとき、急に腕を掴まれた。
振り向いて見てみると……

なのは「……お話聞かせて?」

神「……また面倒ごとが……」

顔を赤くし、眼をうるうるさせながらも…意思を持った瞳を向けた…

高町なのはがいた。

第3話「仲間」(前書き)

神「なかなか人気でないね…」

優氣凛々「テストと頻繁にエンカウントナウ!だからな…更新できねえ……」

ガブリエル《派手に暴りたいなあ…》

ベルゼビュート《派手に逝くのじゃ!…優氣凛々!…》

優氣凛々「ガブリエル、字が違うぞ…(ゞ)´¨¨¨(」

第3話「仲間」

前回のUFD

神が能力を解放し、ドル・ドルトムントを黙らせる。

そして帰ろうとしたとき、急に腕を掴まれた。振り向いて見てみると…高町なのはがいた。

- 廃工場 -

なのは「…お話聞かせて？」

神にとってはかなり迷惑な言葉だった。先ほどの戦闘でさえ面倒極まりないのに……

神「…また面倒ごとが……」

おそらく、かなり長くかかるであろう面倒ごとを抱えてしまったから……

しかも……

なのは「…お願い……」

高町なのははうるうるした眼をこちらに向けて来る。顔も赤い。…
端から見れば……明らかに自分が泣かせたと誤認されかねない。

神「……分かりました。話をするにしても何を言えればいいんですか
？」

これは従わざるを得なかった。しかし、それを聞いたなのはは満面の
笑みを浮かべていた。

なのは「ありがとう！！神君！」

…神が不意に「可愛いな…」と思ってしまったことは内緒である。
すると、空のほうから声がした。

？「なのは！大丈夫だった？」

この透き通るような声には、神は聞き覚えがあった。
上を見上げてみると……

フェイト「え…？神？……何でここに？」

神の予想は当たり、そこには、白のマントをはためかせ、黒の軍服
のような服をきた、フェイト・T・ハラオウンがいた。

何故神がフェイトの声に聞き覚えがあるかと言うと、単に席替えの際に隣になったことがあり、話をしているところを聞いた時があったからだ。

……盗み聞きとは違うので安心して欲しい……
フェイトは神がいることを怪しんでか、かなりジト目で神を見ている。

なのは「ええとね、フェイトちゃん……実は……」

そこでなのはがフェイトに今までの経緯を説明した。聞いたところ、どうやらフェイトもドル・ドルトムントの配下と遭遇したらしく、よくわからないが何処かに護送したらしい。

神「……なんか、ハラウンさんのところに行ったほうが面倒じゃなかったかも……」

ガブリエル《そうみたいだね……》
ベルゼビュート《そうみたいじゃの……》

そう呟いている間に、あちらも粗方話は付いたらしい。二人が神に近付いてきた。

フェイト「神……なのはを助けてくれてありがとう。怪我……大丈夫？」

神「怪我?…ああ、これですか?気にしないでください。かすり傷です。」

なのは「まあ、立ち話もなんだし、翠屋^{じゅいち}行かない?」

フェイト「うん。そうしようか?神もそれでもいいか「ちょっと待った!」ん?どうしたの?」

神はさつきからナチュラルに会話が成立していたことに疑問があった。

神「僕は別にそれでも構いません…でも、あなた方は学校に”早退届け”出しましたか?」

なのは「…アリサちゃんに頼んだから…」

フェイト「大丈夫……だと思っ…かな?」

神「……まあ、大丈夫なら構いませんが…面倒^{めんどう}ごとを増やさないほうが得策ですよ?」

なのは「うん、ありがとう神君！やっぱり神君は優しいんだね？」

”優しい”……その言葉を言われたのは生まれて初めてだった。

神は少し照れたが、なんとか顔に出さないようにしていた。

神「僕は優しくなんてないですよ……ただ、面倒ごとを増やしたくないだけです……。」

神は踵を返した。なのは達は怒らせたかと思ったのか、しゅんとしている。

そんな空気に馴れていない神はなのは等の方に顔だけ向けて……

神「…ほら、話を聞くんでは？早くしましょ？」

なるべく優しい笑顔になるように笑顔を向けた。

なのははそれを見るや否や…

なのは「…っ！／／／う、うん！！行こう！」

顔を真っ赤にしてうつむき、はや歩きで神の隣を過ぎていった。

しかも……

フェイト「……………／／／／／」

フェイトに関しては、完全にフリーズした感じになっていた。

神「…？って高町さん！！聞く本人ほっぽってどこ行くんですかあ
！！？あと、ハラウンさんも動いて！？アゝーッ！！！！面倒だな
あ！！！！」

廃工場には……………神の空しい叫びが木霊していた。

- 喫茶”翠屋” -

神「ここが……………翠屋ですか…？」

なのは「そっだよ どうかしたの？」

神は翠屋を見た途端に固まっていた。冷や汗もかいていたりする。
なぜなら…

神「何で家の近くに…？」

あり得ないくらいに「近所さんだからだった。

なのははその言葉にめをキラキラさせながら神に詰め寄った。

なのは「え！？神君お家近いの？どこなのかな！？」

神「えと…あそこの高層マンションありますよね？」

指を指した先は、翠屋からそう遠くない高層マンションだった。すると、更に横から…

フェイト「え…？あそこのマンション、私の家もあるよ？」

フェイトが驚いた声をあげていた。

なのは「フェイトちゃんと同じマンションだ　で？何階にあるの？」

神「38階です。部屋は3802号室ですよ？」

フェイト「私…3803号室…」

しばらく間が空いて…

神、フ「」……お隣さん？「

二人で顔を見合わせていた。素晴らしい偶然もあるものである。

神「高町さん、親は早退したこと知ってるんですか？」

なのは「大丈夫！私たちは大抵仕事で休むぐらいだから！」

神「……仕事？」

フェイト「そう、それを含めて話をするよ。さあ、入ろ？」

まだ何か突っ掛かりがあるが、神はとりあえず、翠屋に入ることにした。

？「いらっしやい……あら、なのは お帰りなさい！」

なのは「ただいま、お母さん！」

神の目の前にはあり得ない光景が広がっていた。

今、目の前には……高町なのはと、なのはに似ているが、髪をおろしているおっとりした感じのお姉さんがいるが…明らかにお母さんだなんて呼べないレベルの若さだった。

神「……なんだか考えるのも面倒に……」

フェイト「あはは……」

なのは「あっ、お母さん！紹介するね！今日危ういところを助けてくれた天魔 神君！」

神「えと……どうも……」

桃子「あらあら恥ずかしがりなのね」 高町 桃子です。なのはと仲良くしてあげてね？」

神「…はあ………努力します。」

自己紹介が終わったあと、3人は各々の注文をしてテラスに座っていた。

注文の品は…

なのは：シュークリームとアップルティー

フエイト：レアチーズケーキとストレートティー

神：ティラミスとブラックコーヒー

…以上である。

注文の品がきて、粗方舌鼓したあと、神から話を切り出した。

神「まず、高町さんが見た僕の力…：あれを語るには、僕の生まれ
た”天魔一族”について語らねばなりません。」

フエイト「”天魔一族”…？何か特別なことがあるの？」

神はブラックコーヒーを啜りながら語り出す。

神「ここからは少し長いかもしれませんが…。」

”天魔一族”の”天”は”天使”を、”魔”は”悪魔”を意味しま
す。つまり、”天魔一族”は”天使と悪魔の力を授かり、この世の
混沌を無くすために力を奮う”一族なんです。今では疲弊し、1人
しかいませんが…。」

僕の授かりし力は”大天使ガブリエル”と”魔王ベルゼビュート”

です。二人はかなり上位の天使と悪魔なんです。
”天魔一族”の歴史上、二番目位らしいですが……あまり考えてま
せん。

因みに……チョーカーについてる白い十字架がガブリエル、黒い十
字架がベルゼビュートです。二人とも挨拶して？」

ガブリエル《よろしくね？》
ベルゼビュート《よろしくなのじゃ！》

なのは「うん！！よろしくね？」

フェイト「よろしく！」

神は一通り話したのか、コーヒーを啜った。

神「一応話はこれくらいなんですが……分かりましたか？」

なのは達は頷いた。どうやら理解してくれたらしい。

なのは「んじゃ、次はこちらから説明するね？」

そこから神は説明を受けた。時空管理局のこと、デバイス、魔導師、慢性的な人手不足……いろいろなことを教わった。

フエイト「…て訳なんだけど…」

神「……つまるどころ、人手が足りないから入ってくれっことで
すか？」

二人は苦笑いしながら頬を掻いている。

なのは「うん…そうなんだよね…」

神は目を閉じ…しばらくして目を開けた。

神「こんな面倒極まりないこと願ひ下げなんですが……」

乗り掛かった船ですし……入りますよ。時空管理局に。」

こうして、神の非日常は幕を開けた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453z/>

魔法少女リリカルなのはUFD-unforgiven destroyer-

2011年12月18日11時53分発行